

ベトナム人技能実習生にとっての ベトナム寺院の役割に関する質的研究

-アジール機能と心の拠り所機能に注目して-

藤岡 史絵奈 (小峰直史ゼミナール)

HS19-1008H

論文の目次

- 第 1 章 問題の所在
- 第 2 章 研究方法
- 第 3 章 分析
- 第 4 章 考察

論文の要旨

1 問題の所在

在留外国人数は年々増加傾向にあり、中でも技能実習の資格で来日する人の割合は 19%と永住者の次に高い数字となっている。2019 年からは特定技能という労働関係の新たな資格も創設され、今後も労働を目的とする在留外国人は増加すると考えられる。

技能実習制度には受け入れ企業側に対して主に指摘される問題が 2 つある。低賃金・残業代未払い・長時間労働などの労働、及びそれに伴う給料の問題と、パワハラやセクハラを含む職場での人権問題である。これらの問題を起因として失踪や途中帰国を選択せざるを得ない技能実習生もおり、2021 年の不法残留者数は 7,167 人だった。政府の定める国際貢献という目的と、現場で働く人々の目的が乖離している問題もある。これらの現状を米商務省は人身売買や労働力搾取だと批判している。

本論文では技能実習生の中でもベトナム人技能実習生を対象とする。理由は 2 つある。技能実習生や失踪者の内訳ではベトナム人の割合が多いことと、ベトナム人技能実習生は来日のために他国と比べ、莫大な費用と時間を要していることである。中にはかなりの借金をして来日する者もおり、日本に期待と憧れを持ってやっ

てくる。しかしながら、実際に日本で働くと実習先での人権被害や劣悪な労働環境といった問題にぶつかる人も多い。そこで本論文では、日本で劣悪な環境で働く実習生や失踪してしまった実習生に対し、制度面の改善以外に精神面に何が必要なのかを検討する。

ベトナム人技能実習生たちが辛さや孤独から解放されて安心できるような支え、いわゆる心の拠り所を持ちながら、日本で働ける環境を整えることは国として喫緊の課題である (清藤 2021)。しかし、心の拠り所として調査・研究が行われたのは地域日本語教室のみである。同論文では心の拠り所の 1 つとしてベトナム寺院の存在が示唆されており、仏教の信仰の面でベトナム寺院や地域仏教寺院にはどのような役割があるのかも検討していく必要がある。在留外国人にとって宗教活動は信仰上の救済だけでなく、アイデンティティの構築の観点においても重要である (高橋ら 2018)。加えて、宗教施設は、支援施設・アジールとしての機能もあり、在留外国人を対象としてもその特性を持つ (徳田 2015)。しかし、アジールの機能については在留外国人を対象としてはこれまで検討がなされていない。

そこで本論文では、ベトナム人技能実習生に必要なものの 1 つとして、心の拠り所があり、その役割を果たすと考えられるベトナム寺院に注目し、ベトナム寺院における宗教活動は彼らにとってどのような意義を持つのか、さらにはベトナム寺院の心の拠り所やアジールとしての機能はどのようなものがあるのか検討する。

2 研究方法

埼玉県本庄市に位置する D 寺を調査対象とし、支援者 2 名と被支援者 3 名に半構造化インタビュー調査を行った。木下(2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを使用し、分析した。

3 分析結果

支援者・被支援者の立場から分析を行った。

支援者は、被支援者に対して積極的な声かけで愛情と関心を与えながらも普通の人として扱い、自身の生活に一定の責任を持たせていた。また、被支援者の自立を促すために職業紹介なども行っていた。

被支援者にとって D 寺へ行くことは、宗教活動に加えて自国の伝統を守ることで安心感を得ていた。また被支援者同士で悩みを打ち明け、アドバイスし合える環境は、彼らにとって心の拠り所であり、アジールとなっていた。被支援者は日本での宗教活動への欲求から、まずは身近な日本のお寺に行く人が多かったものの、日本のお寺とベトナムのお寺の見た目・習慣が違いため、最終的に宗教活動の場とはならなかった。また、被支援者の中でも宗教活動に違いが見られ、実習先で辛い思いをしている人の方が、活動により積極的になる傾向がみられた。また、転職経験の有無に関わらず、現在は宗教活動よりも仕事を優先しており、宗教活動の頻度は各々の理想よりも少なかった。

4 考察

D 寺のアジール機能について、高島(1999)のあげる DV 被害者のアジール機能を比較すると、共通点が多かったが、同氏の指摘する物質的安全は D 寺では見られなかった。その理由として、今回のインタビューは失踪などの経験がない人であったことが考えられる。しかし実習先から失踪して D 寺に逃げ込んだ人にとっては、物質的安全を感じる可能性がある。共通点としては、アジールは誰を対象としたものであ

っても、安全・同じ苦悩を持つ者との繋がり・自立の 3 つの要素を提供していることである。

心の拠り所機能に関して、地域日本語教室と比較すると、自ら能動的に手に入れたコミュニティの場であることが共通していた。心の拠り所には、自らが能動的に手に入れたコミュニティであるという要素が重要だと考えられる。

実習生が D 寺で悩みを共有し、アドバイスし合う様子は、仏教の「苦」の教えを実践している。苦悩を表出し、共に解決し合うことのできる場合は、アジールの同じ苦悩を持つ者との繋がりという要素と関係し、彼らが心の拠り所として求める要素の 1 つでもあると考えられる。

本論文では支援者と被支援者両方の視点から、D 寺が現在果たしているアジール・心の拠り所機能と、仏教の教えから心の拠り所に対してベトナム人技能実習生が求める要素を明らかにした。今後心の拠り所に必要な要素を、より深く検討する際に活かすことができるだろう。

今回の研究の最大の課題は言語の壁である。彼らが日本語で表現することができず、本心を全て話せなかった可能性は否定できない。今後は翻訳機の使用や、通訳などベトナム語を理解できる手段を持った上で調査する必要がある。

主要参考文献

- 清藤隆春,2021,「仏教とベトナム人技能実習生の心の拠り所:地域日本語教室での PAC 分析の調査をもとに」『地球社会統合科学』28.
- 高橋曲史・白波瀬達也(2018)『現代日本の宗教と多文化共生:移民と地域社会の関係性を探る』,明石書店.
- 高島克子(1999)「ドメスティック・バイオレンス被害者のための“シェルター活動”—予防・危機介入・アフターケアからみた実践報告—」『コミュニティ心理学研究』3.
- 徳田剛(2015)「被災外国人支援におけるカトリック教会の役割と意義—東日本大震災時の組織的対応とフィリピン系被災者への支援活動の事例より—」『地域社会学年報』27.